

と生徒理解と生徒の自己理解が大切であること。自分の生き方を探求するために、自分で課題を見つけて追究して解決していくこと一つのキーワードであろうかと思います。

また、寺田先生からも話がありました情報の取得の重要性です。進路に関する情報を学ぶ活動。どんな仕事があって、社会や産業の動向がどうなっているのかを知る活動です。名大附属の生徒の例として出されましたが、自分でアポイントを取って、手紙を出して、ヒアリングをしてというようなこともひとつの情報活動かと思います。

さらに、体験活動の重要性も指摘されました。実際の紹介例として、生徒主導で行なわれる活動や見学・体験実習によって職業や仕事への関心を高めるといったことであったかと思います。また、今日のシンポジウムを行いまして強く感じたことは、職業体験にしましてもインターンシップにしましても、事前の学習をよくやるということです。体験をした後に事後の学習をする。このことは、キャリア教育というよりは、人間の生き方ないしは勉強の仕方みたいなことだと思います。

欧米の書物などを見ますと、できれば卒業者の追指導、OBを追いかけていくということですか、この取り組みも今後我が国では必要になってくると思います。

以上、先生方から数多くのお話ございましたけれども、まずは16年度がキャリア教育元年ということで、1年後に、再びこうした場所で愛知県が一番素晴らしい取り組み事例を発表できることを祈念して、この会を終えたいと思います。パネリストの皆様どうもありがとうございました。拍手をお願いいたします。

中等教育研究センター長代行 速水敏彦 教授のご挨拶

中等教育研究センターという所の主な仕事は、大学の教官と附属の教官が一緒になりまして、新しいカリキュラムを開発していくということが中心ではないかと思っておりますが、その中にキャリア教育というような部門もございまして、それが今日のこういう会となって結実したと思います。

今日の西 孝雄先生のお話、それからシンポジウムも、本当にそういう趣旨に合った、有意義なお話であったと思います。本当にありがとうございました。

我々も、今日のお話をしっかり受け止めて、これからの研究活動に活かしていきたいと思っております。本当に多数の方にお集まりいただきまして誠にありがとうございました。